

# 全国青年大会開催

## 全国から105名が参加「長崎から発つ」



# 日本聖公会 全国青年ネットワークニュース

八月八日〜一日、長崎にて、全国青年大会が開催された。大会のテーマは、「長崎から発つ」。全国から一〇五名が参加した。初日は城臺美彌子さんの証言。被爆体験、その後の平和への取り組みなどについてお話しをうかがった。原爆投下の日である八月九日には、平和公園・城山小学校・爆心地公園・長崎聖三一教会の四カ所に分かれ、一時二分を迎えた。その後、この大会のもう一つのハイライト、九州教区の青年たちによる長崎の平和ガイド。長崎の各所を小グループで回りながら、戦争が何をもたらすかについて、九州の青年たちが自身の言葉で、全国の青年達に、語りかけた。三日目は、戦争の加害／被害を学ぶ岡まさはる長崎平和資料館見学、これまでの経験の分かち合い、交流会などを行う。最終日は教区ことに集まり、語り合う時をもった。

具体的な内容等については、近々発行予定の大会報告書や青年ネットワークのホームページ等をご覧頂くことにし、当紙面では、九州で青年大会を開催するきっかけを作った一人である柴本司祭に、これまでの経緯や現在の心境等について書いていただくことにした。

### このつながりを大切にしたい。全国青年大会を終えて

最近、様々な出来事やどれくらい身近に感じられるか?ということについて考えさせられてい

る。今夏の全国青年大会の参加者たちが、その後全国各地へと戻って行き、報告会をはじめ、それぞれの足元での取り組みを始めています。そんな動きを伝え聞き、

驚きつつも大変嬉しく思った。もしもこれが関わり無き人たちの取り組みならば、これほどには感じなかっただろう。決してじつくりとはいかなかったものの、確かに同じ場所と同じ時間を過ごした(仲間)たちのことなので、他人事とは思えなかった。つづぐ共に過ごすことの大切さを思った。

今回のテーマは「長崎から発つ」だった。なぜこのテーマになったか:それは繰り返し説明してきたのもう聞き飽きた人もいるかもしれない。が、あえて重ねて説明すれば、毎年九州教区の青年有志が行っているプログラムの名称が「長崎に立つ」。そして今大会をその拡大版と位置づけ、さらに参加者は全国各地から集まってくるので、と

もに被爆地・長崎に立ち、長崎から発つていく。すなわち「長崎から発つ」という言葉を据えることになったのである。しかし遡ると、じつは長崎に始まったわけではない。そもそもは沖繩から始まった。だからテーマなどではないものの、先に数名の「沖繩に立つ」体験があり、「沖繩から発つ」を経て、まわりの人と一緒に足元で何ができるかを考えた時に「長崎に立つ」というプログラムが生まれていったのである。沖繩が長崎につながり、長崎が全国各地とつながるようになっていく。まさに証言者城臺美彌子さんが言われた「今は小さい取り組みであっても、その点があがて線になり、そして面になっていく」ということを具

体的に見せられる思いである。

このつながりをより太くしていくのが、今回顔と顔とつながった私たち同士の間わりだと思える。仲間のいるところ、仲間の関わる出来事はもはや他人事にはなりえない。でも、つながりは放つて置けばすぐに見えなくなってしまう。何度でも引つ張り合って確認したいと思う。

ちょうどこれを書いた日、イラクで拉致されていた日本人青年の死が確認された。はじめは遠い話だと思っていたが、じつはずぐ足元の関わりある人の家族だと知った。ショックだった。つながっていると、感じ方・見方があまりにも大きく変えられることに戸惑っている。(二〇〇四全国青年大会実行委員 司祭 マルコ柴本孝夫)